

腓神経叢切断の急性腓炎に及ぼす影響

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/14911

学位授与番号	医博乙第1112号
学位授与年月日	平成2年12月19日
氏名	菅原 昇次郎
学位論文題目	膵神経叢切断の急性膵炎に及ぼす影響

論文審査委員	主査	教授	宮崎 逸夫
	副査	教授	岩 喬
		教授	磨伊 正義
		教授	中西 功夫

内容の要旨および審査の結果の要旨

慢性再発性膵炎では、疼痛治療のために膵神経叢切断術が行なわれる。しかし、膵神経叢切断の急性膵炎発作時における膵外分泌機能への影響は明らかでなく、これを検索することは臨床的に重要である。著者は膵神経叢切断を行ったラットに急性膵炎を作製し、膵の組織学的変化および膵外分泌機能の変動を経時的に検討した。

Wister系雄性ラットを用い、膵神経叢切断後または単開腹後14日目に総胆管末端を48時間閉塞し、急性浮腫性膵炎を作製した。前者を膵神経叢切断膵炎群、後者を対照膵炎群とした。膵神経叢切断前および切断後14日目に膵臓を摘出し、Karnousky-Root's変法によりアセチルコリン染色を行い、Formaldehyde, Glutaraldehyde, Sucrose法にてアドレナリン染色を行った。研究成果は以下のように要約される。

- (1) 膵神経叢切断14日後には、膵組織内神経線維のアセチルコリンおよびカテコールアミン活性は著明に減少した。
- (2) 膵神経叢切断後14日目の膵のTrichloroacetic Acid (TCA) 不溶分画中への標識アミノ酸の取り込みは、単開腹の取り込みに比べ低下し、両群間に有意差を認めた ($p < 0.05$)。
- (3) 膵神経叢切断膵炎群および対照膵炎群における膵のTCA不溶分画中の標識アミノ酸の取り込みは膵炎作製後に低下したが、両群間の活性値には差を認めなかった。

また、膵組織内外分泌酵素値は閉塞解除後2日目に最低となり、その後、漸増したが、両群間には差を認めなかった。

- (4) 膵神経叢切断膵炎群および対照膵炎群では、閉塞解除後の膵における標識指数値および有糸分裂指数値に増加がみられたが、両群間には差を認めなかった。
- (5) 膵神経叢切断膵炎群および対照膵炎群の閉塞解除後2日目における膵は間質の浮腫と細胞浸潤、外分泌細胞内のチモーゲン顆粒の減少、および小範囲の実質壊死を示したが、両群間の組織学的変化には差を認めなかった。

以上の成績より、膵神経叢切断は急性膵炎発症後の膵外分泌細胞の機能回復に影響を及ぼさないことが示唆された。本論文は膵神経叢切断が急性膵炎に与える影響を明らかにした点で膵臓病学に寄与する労作であると認められた。